

# Adobe InDesign 2.0J : 日本語パブリッシングのワークフローを革新

## 生産性と投資収益に対する影響

1980年代後半、DTPはこれまでの高価で複雑な専用組版システムや整版システムを、DTPソフトウェアと安価なパーソナル・コンピュータに置き換えるという画期的な提案として登場しました。そして、当初は出版・広告・印刷業界のプロフェッショナルから疑問視されたにもかかわらず、DTPは急速に世界の大半、ことに欧米でこれらの業界に大きな変革をもたらしました。

この成功には単純な理由がありました。Aldus PageMakerやQuarkXPressといったデスクトップ・ページレイアウトアプリケーションが、従来のハイエンド組版システムの全機能にこそ及ばないながらも、編集者や制作者たちを納得させるのに十分な印刷物の制作機能を備えていたからです。しかし、日本市場の状況はまったく異なっていました。日本語組版に必要な基本的機能を提供するQuarkXPressの日本語版が比較的早い時期に発売されましたが、編集者や制作者たちの多くは、制作する印刷物に必要な組版機能や書体の品質を得るにはDTPでは不十分であると、当時もそして今も感じているのです。その結果、現在でも、従来の組版システムが日本の出版・印刷業界の大半で使用されています。

そこへ3年前に発売されたのが、グリッドを使用した組版機能を備えたAdobe InDesign 1.0Jです。この新しいページレイアウトアプリケーションには、QuarkXPressでは不可能か、あるいは高価なXTensionなどが必要だった、多くの高度な日本語組版機能が標準で搭載されました。さらにAdobe InDesign 2.0Jでは、高度に制御可能なルビ機能など、日本語組版に特有の多くのルールに対応する多彩な機能が標準で追加されました。

### このレポートについて

このレポートは、ファイファー・コンサルティングがアドビ・システムズのために2002年に実施した生産性と投資収益率に関する調査に基づいています。日本の印刷物の制作ワークフローや日本語組版特有の側面の詳細を対象とするために、この調査に変更が加えられ、調査範囲が拡大されました。

日本語組版の具体的な生産性ベンチマークは、ファイファー・コンサルティングの生産性ベンチマークテストの方法論を用いて有限会社イメージエクスプレインの佐々木 剛氏によって考案され実施されました。

これらのベンチマークでは、Adobe InDesign 2.0Jと日本語組版専用のXTensionを含むQuarkXPressを使用した出版のワークフローとを比較しています。さらに、ドロップシャドウや透明効果のサポート、Adobe PhotoshopやAdobe Illustratorなどのアプリケーションとの緊密な連携といったAdobe InDesign 2.0J本来の機能の影響を測定するため、追加の生産性ベンチマークを実施しました。ベンチマークの方法論や使用したハードウェア構成の詳細については、3ページの「ベンチマークテストの環境」の欄を参照してください。

## 所見

- Adobe InDesign 2.0Jは、従来ハイエンド組版システムでしか利用できなかった数多くの高度な日本語組版機能を提供しています。
- 統合された機能により、Adobe InDesign 2.0Jでは、QuarkXPress 4.1Jを使用したワークフローと比べて生産性を大幅に向上することができます。
- Adobe PhotoshopやAdobe Illustratorとの緊密な連携により、多くのデザインやパブリッシングのワークフローでAdobe InDesign 2.0Jの生産性が向上します。

## ファイファー・コンサルティングについて

- ファイファー・コンサルティングは、パブリッシング、デジタルコンテンツの制作、およびニューメディア・プロフェッショナルのニーズを重点的に扱う独立した技術研究・コンサルティング機関です。
- Adobe InDesign 2.0Jの生産性ベンチマークレポートの全文は、<http://www.pfeifferreport.com> でダウンロードしてください。

**Pfeiffer**  
Consulting  
01001011

# Adobe InDesign 2.0J : パブリッシングへの新たな提案

## ポイント

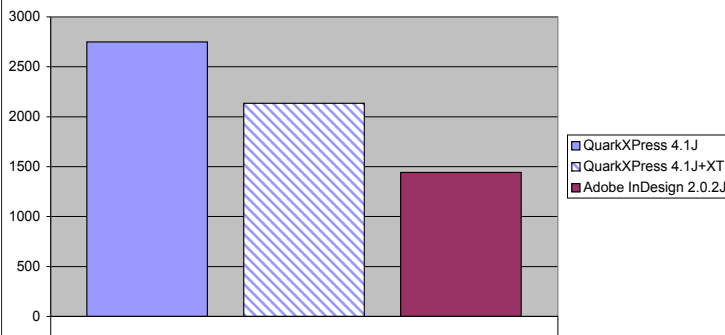
- Adobe InDesign 2.0J は、ページレイアウトアプリケーションでの創作の自由度を高める **DTP の新しい方法**を提供します。
- Adobe InDesign 2.0J の高度な組版機能により、**縦組み・横組みのどちらでも生産性が向上します**。
- QuarkXPress 4.1J に日本語組版専用の XTention を組み込んだワークフローよりも、Adobe InDesign 2.0J の方が高い生産性が得られます。

今日知られている DTP は、1980 年代後半の Aldus PageMaker や QuarkXPress といったページレイアウトアプリケーションの登場によって始まりました。そして Adobe Illustrator や Adobe Photoshop といったページデータを作成する上で必要不可欠なグラフィック・画像処理アプリケーションが登場したことによって、その作業工程や使用方法が確立されました。これらのアプリケーションによるワークフローは、現在でもほとんど変化していません。メインとなるページレイアウトアプリケーションで組版を行い、それ以外のアプリケーションで作成されたグラフィック要素をページ上に配置するスタイルです。このような従来の DTP ワークフローでは、ページレイアウトアプリケーションは単に全体をまとめる役割を担っているだけです。即ち、Adobe Illustrator などのようなアプリケーションと比較すると、QuarkXPress はクリエイティブな可能性が比較的限られたものと言えます。

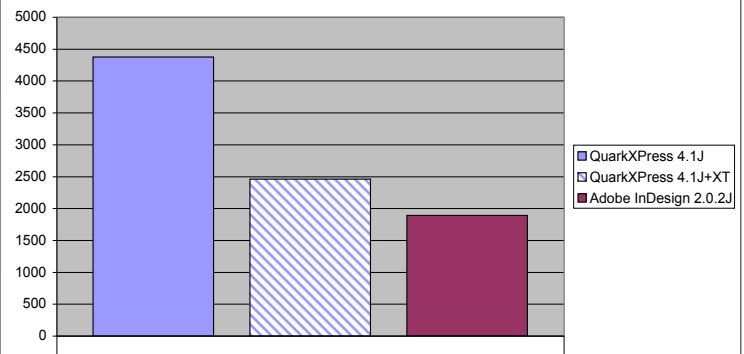
つまり、多くのデザイナーのクリエイティブな作業が、実際には QuarkXPress ではなく Adobe Illustrator や Adobe Photoshop で実現されていたわけです。これは、従来の PostScript フォントではプリンタ側にもアウトラインフォントが必要不可欠なため、ページ全体を Adobe Illustrator で作成して文字をアウトライン化すること多い日本においては、とくに言えることです。当然ながら、この作業方法はかなり複雑なものになることがあり、複雑なデザインのページを作成しようとすると、非常にストレスのかかる作業となることすらあるのです。**クリエイティブ作業が可能なアプリケーションとページレイアウトアプリケーション間を相互にやりとりする作業は、生産性を著しく低下させます**（これらの側面については、後ほどこのレポートで詳しく検討します）。

## 生産性の比較：横組みと縦組み

横組みでの簡単なレイアウト(手順書に従って)ーテスト合計時間  
マシンスペック:標準環境 時間単位:秒



縦組みでの簡単なレイアウト(レイアウト指定に従って)ーテスト合計時間  
マシンスペック:標準環境 時間単位:秒



このプロジェクトのために実施されたベンチマークテストでは、日本語組版における生産性を横組み(左図)と縦組み(右図)の両方について測定しています。ベンチマークの手順は、プロフェッショナルの組版オペレータによる作業方法を厳密に模しており、校正・修正行程も含んでいます(詳細についてはベンチマークレポートの全文

を参照してください)。QuarkXPress 4.1J については、製品出荷時の状態だけでなく、日本語組版専用の XTention を使用した場合(グラフの中央のバー)についてもテストをしました。それでもやはり、生産性は Adobe InDesign 2.0J の方がはるかに優れていました。

## ベンチマークテストの内容

このレポートは、ファイファー・コンサルティングがAdobe社のために実施した国際市場調査と市場特有の生産性ベンチマークに基づいています。日本語組版特有の部分に関するベンチマークは、(ファイファー・コンサルティングの生産性ベンチマークの方法論に基づいて) 有限会社イメージエクスプレインの佐々木 剛氏によって規定され監督されました。

このテストでは2種類のベンチマークテストを実施しました。それは日本語組版に特有の組版生産性ベンチマークテストと、アプリケーション間での連携のためのベンチマークテストです。日本市場特有のページレイアウトのテストには、「縦組み」と「横組み」、および「複雑なページレイアウト (Adobe IllustratorやAdobe Photoshopとの連携を含む)」が含まれます。追加ベンチマークテストでは、Adobe InDesign 2.0J特有の機能が生産性全体に与える影響を測定しました。システム構成やベンチマークの方法論の詳細については、<http://www.pfeifferreport.com>で「Adobe InDesign 2.0Jの生産性ベンチマークレポート」の全文をダウンロードしてください。

## ベンチマークテストの環境

ベンチマークテストはすべてMacintoshプラットフォームで実施しました。各ベンチマークテストは、日本のDTP業界の平均的な機器に相当する標準仕様だけでなくハイスペック仕様でも3回ずつ実施し、平均値を記載しました。

**標準環境:** 256MBのメモリーを搭載した400MHzのPower Macintosh G3

**ハイスペック環境:** 512MBのメモリーを搭載した1GHzのPower Macintosh G4

**ソフトウェア:** 市販されている最新版の各ソフトウェアパッケージを使用しています (QuarkXPress 4.1Jについては、日本語組版で広く使用されているXTensionを入れた状態でもテストしています)。現実の作業条件を可能な限り厳密に再現するため、各ベンチマークテストは自動化スクリプトは一切使用していません。

詳細については、[research@pfeifferreport.com](mailto:research@pfeifferreport.com)までご連絡ください(英語のみ)。

このレポートはファイファー・コンサルティング (<http://www.pfeifferconsulting.com>) が作成しました。このレポートのいかなる部分についてもファイファー・コンサルティングおよび有限会社イメージエクスプレインとの書面による事前の同意なしに、電気、機械、複写、録音、そのほかのいかなる形式や手段によって、複製および検索システムへの保存や転送は一切禁止されています。

p3、p5のテキストおよびすべてのグラフは佐々木 剛 (@Takashi SASAKI) の著作物です。その他のすべてのテキストおよびイラストはファイファー・コンサルティング (@Pfeiffer Consulting) の著作物です。

詳細については、[research@pfeifferreport.com](mailto:research@pfeifferreport.com)までご連絡ください。

このレポートで示したデータは、評価や一般的なシミュレーションであり、情報提供だけを目的としたものです。この情報は、既存の会社やワークフロー状況についての特定の生産性調査や計算値を提供するためのものではなく、またそれらに代わりうるものでもありません。ファイファー・コンサルティングは、このレポートに記載された情報や、助言、および推奨事項の使用、ならびにそれらに基づく行動に対する責任は一切取りません。また、このレポートや関連文書に記載されたデータに基づく購入、設備・投資、その他あらゆる意志決定や事業に対しても責任を負いません。

## 日本の出版物制作工程におけるDTP

日本のDTPの状況は、他国よりも非常に複雑です。Quark社は日本市場向け主力商品として、ページレイアウトアプリケーションであるXPressの2つのメジャー・バージョン(バージョン3.xと4.x)を発売しました。しかし、多くの日本の出版社や制作会社、印刷会社は、制作行程をDTPに移行することを躊躇しました。これにはもっともな理由があります。

QuarkXPressが欧米では「印刷物を制作作業を始めるのに必要なツールはすべて備えている」と認識される際に、ハイエンド組版システムの精巧な機能がすべて備わっている必要はありませんでした。ところが日本では違いました。たしかに、QuarkXPressは日本語組版に必要な不可欠な要素の一部をサポートしてはいるものの、従来から確立された専用システムなどのハイエンド組版システムには、多くの点で及ばないとみなされたのです。もちろん、XTension開発会社の参入によって、日本語組版用のさまざまな追加機能が発売されています。しかし、このような状況下でも日本の出版・印刷業界では、欧米の出版・印刷業界のように制作工程をDTPに移行していません。

\*信頼できる市場データの入手はかなり困難ですが、日本国内での出版物はせいぜい30~40%がDTPで制作されているに過ぎないと一般的に推定されています。一方、欧米では、印刷物制作は従来の方法からDTPに事実上完全に移行しています。

## 日本語パブリッシングへの新たな提案

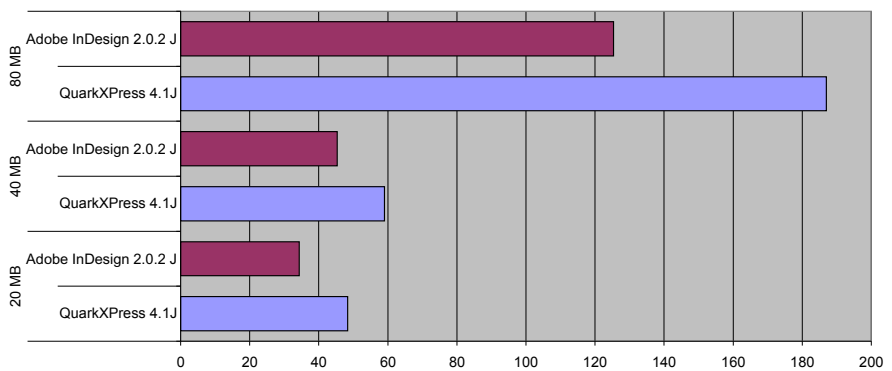
Adobe InDesign 2.0Jは、初めからとても高度な組版機能の提供を目指していました。これは、欧米版のAdobe InDesignの組版機能についても言えることです(Adobe InDesignは、従来のページレイアウトアプリケーションでは不可能だった精巧な組版機能を提供しています)が、とくに日本市場について顕著です。Adobe InDesign 2.0Jには、他のページレイアウトアプリケーションと比較して多くの優れた機能があります。

たとえば、括弧や句読点などを半角として扱うなど、約物に対する細かな設定が可能です。もちろん、約物以外の漢字やカナなども個別に複雑な設定が可能です。また、ルビの細かなサイズや位置の調整、字取り・行取り機能など、日本語組版に特化したさまざまな機能が搭載されているのです。

このように、Adobe InDesign 2.0Jはハイエンドの組版システムで実現できる組版の品質を、DTPユーザーに提供することを目指しています。つまり、Adobe InDesign 2.0Jは日本で行われている出版物の制作行程に多大な変化をもたらす可能性があるのです。このレポートでは、生産性の向上の一部が制作者にとって、大きな期待に値するものであることを示しています。また、Adobe社のアプリケーションのもっとも大きな影響は、高品質な組版をDTPのワークフローにおいて実現したことだと考えられます。

## Adobe Photoshopとの連携：生産性の向上

ビットマップ画像データの編集とリンク更新一テスト合計時間  
マシンスペック:標準環境 時間単位:秒



このチャートは、20、40、80MBの、複数のレイヤーを使用したAdobe Photoshopのネイティブファイルを編集して保存、QuarkXPress 4.1JまたはAdobe InDesign 2.0J上に貼り込まれているレイアウトを更新する作業についての生産性の向上を示しています。複数のレイヤーを使用したAdobe PhotoshopのネイティブファイルをAdobe InDesign 2.0Jは直接配置することが可能なため、レイヤーを統合してEPS形式などで保存することが必要なワークフローより生産性が一貫して向上していることがわかります。

# 雑誌のワークフローにおける 生産性の向上

## ポイント

- Adobe Photoshop や Adobe Illustrator との連携により、Adobe InDesign 2.0J は多くの雑誌出版ワークフローにおいて生産性の面で明らかに優れています。
- 透明効果やドロップシャドウなどクリエイティブな作業で使用される機能のサポートにより、雑誌制作における生産性を著しく向上することが可能です。
- 日本語組版の充実したサポートにより、初校組みから修正工程全体を通じて生産性が向上します。

## 雑誌という課題

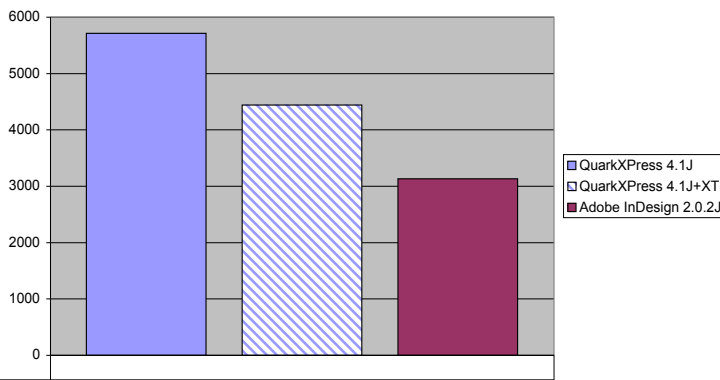
雑誌制作のワークフローは、さまざまなページレイアウトアプリケーションにとって、とても大きな課題となっています。書籍や新聞などのデザインがDTPの出現以来それほど変化していないのに対して、雑誌では新しい世代のグラフィック・ツールやデザイン・ツールが提供する多くの機能や効果を取り入れてきたためです。

とくに日本市場では、Adobe InDesign 2.0Jの登場が雑誌出版における制作工程に著しい影響を与える可能性があります。これにはさまざまな側面があります。まず基本的なこととして、Adobe InDesign 2.0Jが新しいフォントフォーマットであるOpenTypeフォント(以下OTF)をサポートしている点が挙げられます。これは欧米においても革命的なことですが、日本市場においてはとくに重要なことといえます(フォントの欄を参照してください)。

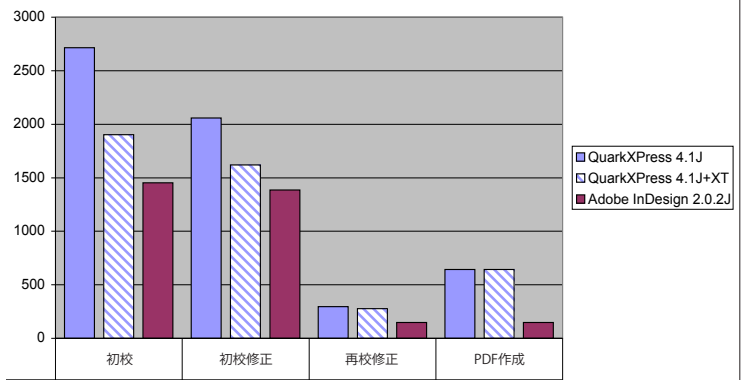
また、フォント以外にも、**Adobe IllustratorやAdobe Photoshopといった必要不可欠なグラフィックアプリケーションとの連携でも、Adobe InDesign 2.0Jは従来とはまったく異なる方法を提供しています。**もちろん、これまでのDTPワークフローでも連携はすでに行われており、ページレイアウトアプリケーションが全体のまとめ役を担い、デザイナーがテキスト、写真画像、ベクター画像を組み合わせることはできます。しかし、Adobe InDesignが登場する以前は、これらのアプリケーションでのデザインの可能性は非常に限られていました。これまでのDTPワークフローでは、フチ付きの見出しや、ドロップシャドウ、写真の透明効果などのグラフィック効果は、Adobe IllustratorやAdobe Photoshop

## 複雑なページレイアウト：主な生産性評価

複雑なレイアウト-テスト合計時間  
マシンスペック:標準環境 時間単位:秒



複雑なレイアウト-テスト詳細時間  
マシンスペック:標準環境 時間単位:秒



複雑なページレイアウトのために実施されたベンチマークテストの手順には、一般的な組版作業(見出しや本文の文字組み行程)とグラフィック関連の作業(フチ加工した見出しの作成、配置した写真に対する透明効果など)が含まれます。

ベンチマークテストの結果、Adobe InDesign 2.0Jの生産性はQuarkXPress 4.1Jの製品出荷時の状態と比べて約2倍でした。日本語組版専用のXTensionを組み込んだQuarkXPress 4.1Jと比較しても、Adobe InDesign 2.0Jの方が約50%高速となっています。

# OCF vs OTF : 日本語フォント環境における大きな変化

OCFとOTFを比較すると、OTFが優れている点は数多く存在します。なかでも特筆すべきこととして、以下のようなことが挙げられます。

## ・異体字のサポート

漢字には多くの異体字(外字)が存在します。たとえば、「高」に対して「髙」、「吉」に対して「吉」、「辺」に対して「邊」などがあるでしょう。しかし、OCFにはこれらの異体字は含まれておらず、83年度版のJISで定義されている漢字を含む7,245字のみしか利用できませんでした。もちろん、この文字数では出版物を作成するためには少ないわけ、この問題を解決するために外字フォントが必要不可欠だったのです。しかし、外字フォントにすべての異体字があるわけではありませんから、制作者が自作で外字フォントを作成することも日常的に行われていたのです。このように、長年DTPでは外字は外字フォントを利用してきたわけですが、意外な問題も存在しました。それは、外字フォントを使用したデータを他のデータに変換したときに文字が変わってしまうといった問題です。これは昨今頻度が高まっているDTPデータの2次利用に際して、大きな問題と言えるでしょう。

ところが、OTFは15,444字(AdobeJapan 1-4)をサポートしています。一般的な雑誌や書籍などでは十分な文字数でしょう。そして、その文字の多くはユニコードで定義されているので、ユニコードをサポートしているアプリケーション間では、文字が変わってしまう心配はありません。

## ・クロスプラットフォームでの互換

OCFはクロスプラットフォームでのデータ互換が不可能でした。なぜならば、OCFでは同じフォントであっても、Macintosh版とWindows版のフォントでは文字のサイズ(幅や高さ)が異なったためです。ですから、データをMacintoshとWindowsで相互にやり取りすると、文字のリフローなどが発生したのです。また、文字コードの外字エリアも異なっていたため、記号類などで文字が変わってしまうといった問題もありました。

しかし、OTFはこれらの諸問題は解決されているので、完全に互換が可能です。つまり、編集者はWindowsを使用、制作会社がMacintoshを使用して、相互にデータをやり取りしても問題は発生しないのです。

## ・フォントのダウンロード

OCFではドキュメント上で使用しているフォントは、プリンタに搭載されていなければいけません。このためユーザーは高価なプリンタフォントを購入しなければなりませんでした。

しかし、OTFはフォントをプリンタへダウンロードすることが可能です。このため、ユーザーは高価なプリンタフォントを購入する必要がないのです。

このように、OTFはOCFよりはるかに優れていると言えますから、リリースする対価を投資するだけの価値は十分あるでしょう。

●で作業・保存をしてから、ページレイアウトアプリケーションに配置する必要があります。この作業工程では、**レイヤーなどを保持したネイティブファイルと、ページレイアウトアプリケーションへの配置用にレイヤーを統合・保存したEPS形式などのファイルと**といったように、**別々のファイルを保管する必要があるのです。**

このことは、デザイナーに2つの点で直接影響を及ぼします。たとえば、同じドキュメントの改訂版がいくつかある場合、ファイルの管理が非常に複雑になる、ということが挙げられます。また、**デザインの創作試行は非常に時間がかかるわけですが、作成したグラフィックとページレイアウトアプリケーションとの統合が複雑だというだけのために、デザイナーは単純な効果に固執しがちになるということも考えられるのです。**

## 新しいパブリッシングのワークフロー

従来のページレイアウトアプリケーションではなく、Adobe InDesign 2.0Jで制作を行うとワークフローは大きく変化します。最初の大きな違いは、従来のDTPワークフローではXTensionなどを必要とした機能の多くが、Adobe InDesign 2.0Jには標準搭載されていることです。たとえば、**任意の太さなどが適用できるフチ文字や、ドロップシャドウ、透明効果、さらにPDFファイルの作成さえも直接Adobe InDesign 2.0Jで実現できます。**当然その結果、生産性が著しく向上します(このレポートの関連項目を参照してください)。

2つめの変化はアプリケーションの連携にあります。Adobe InDesign 2.0JがAdobe IllustratorやAdobe Photoshopの一部の機能を統合しているとはいえ、当然これらのアプリケーションが必要なくなるわけではありません。しかし、デザイナーが使用するさまざまなアプリケーション間の連携は大幅に効率化されています。Adobe InDesign 2.0Jでは、複数のレイヤーや効果を使用したAdobe Photoshopのネイティブファイルを直接配置して、ファイルが保存された時点で表示していたレイヤーの状態を表示・印刷することができますので、TIFF形式やEPS形式などの汎用ファイル形式を必要とすることが少なくなります。もちろん、Adobe IllustratorのネイティブファイルをAdobe InDesign 2.0Jのドキュメントに配置して、元のアプリケーションで表示されていたのとまったく同じように表示・印刷することもできます。また、ハイエンドな運用としては推奨できませんが、RGBのAdobe PhotoshopファイルをAdobe InDesign 2.0Jのドキュメントに配置して、CMYKで出力することさえできるのです。このレポートのために実施されたベンチマークテストで得られた結果を分析すれば、新しいワークフローによって生産性が向上することは明白です。

最後に、組版に関連した生産性の向上という大変重要な変化が挙げられます。**Adobe InDesign 2.0Jでは高度な組版の機能が十分に実現されているため、縦組み、横組み、また複雑なドキュメントの作業でも、生産性が明らかに向上します。**一般的に印刷物の制作がスローダウンしがちな修正工程で、生産性の大幅な向上が認められたことは大変興味深い点と言えるでしょう。

## ケーススタディ 書籍出版

多くの出版社では、とても古いワークフローで編集作業が行われています。それは活版時代からの伝統的でアナログな方法です。この方法では、1つの作業のために2つのステップが必要になります。それは指示をする作業(指定)と、それを実行する作業です。ほとんどの編集者は、**見出しなどのスタイルや文字の修正、異体字をゲラ上で指定します。もちろん、この作業はすべて手書きです。**そして、組版オペレータはその指示書に従い組版作業をします。この方法は、現在ではとても非効率だと言えます。また、指示の見落としなどによる**組版オペレータのミスを防ぐこともできません。**

しかし、Adobe InDesign 2.0JやMicrosoft Word、OTFなどを使用すると、一連の作業効率を向上することが可能です。まず、編集者は見出しなどのスタイルや文字の修正、異体字をMicrosoft Word上で指定します。もちろん用字・用語の統一などの編集作業は、検索置換機能やマクロ機能を利用することによって、効率よく実行できます。そして、編集されたMicrosoft Wordデータを組版オペレータはAdobe InDesign 2.0Jに配置、適正な文字組み設定を行えば作業は完了です。**このワークフローを利用すれば、作業時間やミスは大幅に削減可能です。**

さらに、Adobe InDesign 2.0JはPDFを直接作成できますので、オンライン校正も容易です。PDFで行うオンライン校正では、編集者は赤字などをPDFに直接書き込みます。組版オペレータは書き込まれたテキストデータを利用できますから、従来のように赤字を読んで文字を入力する作業が軽減され、やはり時間やミスが削減できるわけです。

日本の某出版社がこのようなワークフローで書籍の制作を行ったところ、**製作工程の時間を30%減少することができました。そして、制作コストは50%も削減ができたのです。**もちろん、編集者や組版オペレータのトレーニングは必要です。しかし、**トレーニングに必要なコストより、削減できる制作コストの方が大きいことは言うまでもありません。**

# ROI (投資収益率) :

## Adobe InDesign 2.0Jは 出版業界のワークフローで どのような経済効果を上げるか

### ポイント

- 市場特有の生産性の評価は、**Adobe InDesign 2.0Jでの生産性がQuarkXPress 4.1Jを使用したワークフローを著しく上回ることを示しています。**
- Adobe PhotoshopやAdobe Illustratorとの連携の強化、およびPDFサポートの強化が生産性向上の重要な要素です。**
- 精巧な組版機能が多くの出版物のワークフローで生産性を著しく向上します。

**ROI (投資収益率) とは何か?** ほとんどの業界ではROIを求めることは簡単ですが、デザインや出版の世界ではそうではありません。出版社やデザイナーにとってROIを定義することは、単に金融投資と収益を比較検討することよりはるかに複雑です。

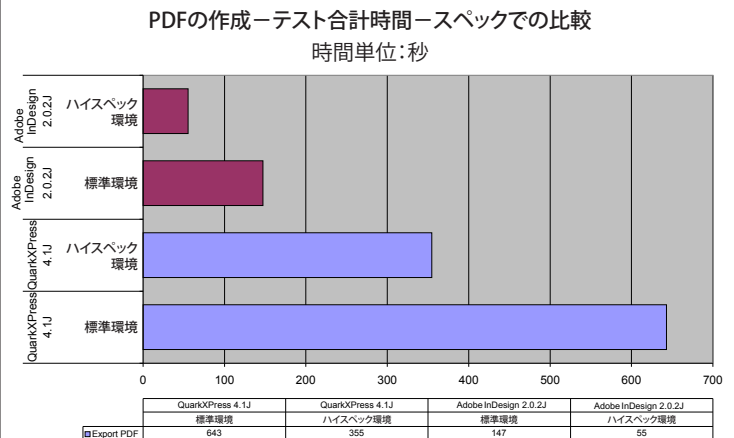
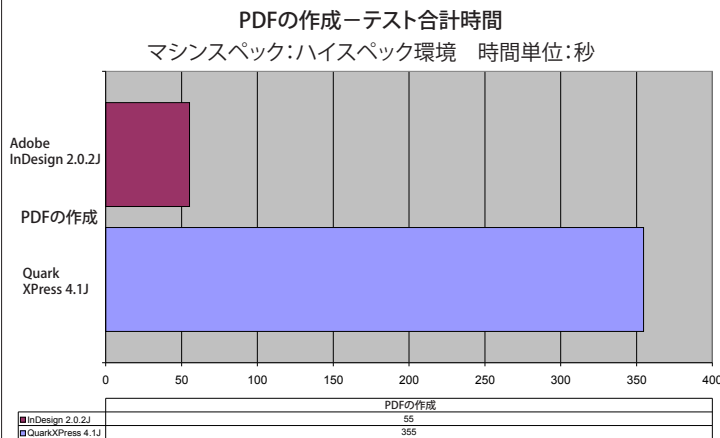
その複雑さは、投資を構成する要素を定義することから始まります。Adobe InDesign 2.0Jを導入する場合でも、なかにはソフトウェアやフォントのライセンスコストだけを考える人もいれば、トレーニングコストを心配する人、それ自体が重要な移行であるMacOS Xへのアップグレードも必要になるかもしれないと考える人もいます。

また、一般的に会社が大きくなるほど状況も複雑になります。同じように、投資から得られる収益に該当する要素も大きく異なります。**多くの制作者にとって、時間の節約は競争の激しい市場での創作面の優位性の獲得や維持と同じくらい重要です。**

### 生産性の向上による節約

この調査プロジェクトのために実施された生産性の評価は、Adobe社のページレイアウトアプリケーションを使用することによって、著しく生産性が向上することを示しています。**Adobe InDesign 2.0Jは主なテスト課題のすべてにおいて、QuarkXPress 4.1Jを使用したワークフローよりもはるかに効率よく生産が可能でした。QuarkXPress 4.1JにXTensionを組み込んだ場合でも同様です。**また、生産性低下の主な原因であるデータの修正工程で、とくに生産性が向上することがわかります。さらに、透明効果やドロップシャドウなどの

## PDFの作成：パフォーマンスの比較



PDFの作成は、多くの出版ワークフローでもとても重要な要素になってきています。QuarkXPressで行われるPDFの作成工程には、PostScriptファイルの作成が含まれるため非常に複雑と言えます。QuarkXPressでの工程では、作成されたPostScriptファイルをAdobe Acrobat Distillerを使ってPDFに変換します。一方、Adobe InDesign 2.0JではAdobe Acrobat Distiller

を使用せずにドキュメントを直接PDFに書き出すことが可能なため、生産性が大幅に向上します。

データの内容などにもよりますが、Adobe InDesign 2.0Jはこの操作がQuarkXPress 4.1Jに比べて4~7倍も高速です。

# Adobe InDesign 2.0.2Jを使用したワークフローについてのROI (投資収益率) 予測

生産性の増減	測定結果(秒) QX 4.1J	測定結果(秒) QX 4.1J + XT	測定結果(秒) InD 2J	時間の増減(秒) InD 2J - QX 4.1J	QX 4.1Jに対する 増減率(%)	時間の増減(秒) InD 2J - QX 4.1J + XT	QX 4.1J + XTに対 する増減率(%)	¥ 2500/時の 場合の効果	¥ 3500/時の 場合の効果	¥ 5000/時の 場合の効果	¥ 6000/時の 場合の効果
縦組み	4,232	2,218	1,741	2,491	58.86%	477	21.51%	¥1,730	¥2,422	¥3,460	¥4,152
QX 4.1J + XTに対する節減効果								¥331	¥464	¥663	¥795
横組み	2,748	2,136	1,443	1,305	47.49%	693	32.44%	¥906	¥1,269	¥1,813	¥2,175
QX 4.1J + XTに対する節減効果								¥481	¥674	¥963	¥1,155
複雑なレイアウト	5,712	4,443	3,133	2,579	45.15%	1,310	29.48%	¥1,791	¥2,507	¥3,582	¥4,298
QX 4.1J + XTに対する節減効果								¥910	¥1,274	¥1,819	¥2,183
Photoshopとの連携 40MB	59	-	45	14	23.73%	-	-	¥9.72	¥13.61	¥19.44	¥23.33
10回のおペレーションで得られる節減効果								¥97	¥136	¥194	¥233
100回のおペレーションで得られる節減効果								¥972	¥1,361	¥1,944	¥2,333
Photoshopとの連携 80MB	187	-	125	62	33.16%	-	-	¥43.06	¥60.28	¥86.11	¥103.33
10回のおペレーションで得られる節減効果								¥431	¥603	¥861	¥1,033
100回のおペレーションで得られる節減効果								¥4,306	¥6,028	¥8,611	¥10,333
簡単な透明効果	135	-	15	120	88.89%	-	-	¥83.33	¥116.67	¥166.67	¥200.00
10回のおペレーションで得られる節減効果								¥833	¥1,167	¥1,667	¥2,000
100回のおペレーションで得られる節減効果								¥8,333	¥11,667	¥16,667	¥20,000
ドロップシャドウの作成	113	-	11	102	90.27%	-	-	¥70.83	¥99.17	¥141.67	¥170.00
10回のおペレーションで得られる節減効果								¥708	¥992	¥1,417	¥1,700
100回のおペレーションで得られる節減効果								¥7,083	¥9,917	¥14,167	¥17,000
PDFの書き出し	643	-	147	496	77.14%	-	-	¥344.44	¥482.22	¥688.89	¥826.67
10回のおペレーションで得られる節減効果								¥3,444	¥4,822	¥6,889	¥8,267
100回のおペレーションで得られる節減効果								¥34,444	¥48,222	¥68,889	¥82,667

頻りに使用されるデザインワークがページレイアウトアプリケーションで利用できるだけでなく、Adobe PhotoshopやAdobe Illustratorとの連携が強化されているため時間を大幅に節約でき、デザインの試行錯誤が容易になります。その結果、アートディレクターは従来に比べ、社内外の制作部門へのデータ作成の依存度合いを減らすことが可能になるのです。

**思い通りの結果を得るための必要な工程数を減らすことで、さまざまな利益が生まれま**す。もっともわかりやすいことは時間の節約ですが、それだけではありません。デザイナーやアートディレクターにとって、デザインを完成させるための工程数が少ないということは、**創作意欲が低下することを防ぎ、自由に試せるデザインの幅が広がる**ということが挙げられます。

またこれも重要なことですが、制作環境では**工程数が少ないとトラブルやミスを軽減できます**。たとえば、異なるファイル形式や別の名前で(ときには違うディレクトリに)ファイルを保存するといった場合、さまざまなトラブルやミスが考えられます。こうした操作のどれもがオペレーターの単純ミスという潜在的なリスクを伴い、またこのようなミスは発見が難しく修正に時間がかかるのです。

多くの場合、高いROI(投資収益率)はワークフローの合理化によって生まれます。生産性の評価からわかることは、ページレイアウトデータに貼り込まれている画像をAdobe Photoshopのネイティブファイルで修正を行い、ページレイアウトデータで更新をするといった工程で、30秒から1分ほど時間を節約できるのです。デザイナーがこの方法で1日に6分ずつ、1カ月の勤務日数である20日間で換算すると、Adobe InDesign 2.0JとAdobe Photoshopとの緊密な連携といったことだけで、月末までに2時間も節約できることになるのです。制作部門でこのような作業が日常的に行われている場合、この機能だけで相当な節約が可能になります。さらに、このレポートのために実施された生産性ベンチマークテストによると、Adobe InDesign 2.0JでのPDF作成はQuarkXPress 4.1Jより大幅に時間が節約できることがわかりました。

**もちろん、主なROIは表からもわかるように、さまざまな生産性向上が蓄積した結果なのです。**

この表はAdobe InDesign 2.0.2Jの機能における投資効率のうち、QuarkXPress 4.1JおよびXTentionを付加した状態で構築されるワークフロー上で産出することが可能な機能について示しています。

表中で使用されている略語は

- QX 4.1J = QuarkXPress 4.1J
- XT = XTention
- InD 2J = Adobe InDesign 2.0.2J
- Photoshop = Adobe Photoshopを意味します。

# Adobe InDesign 2.0Jの機能は 生産性にどのような影響を与えるか

## ポイント

- 統合された機能により、Adobe InDesign 2.0Jでは、QuarkXPress 4.1Jを使用したワークフローに比べて明らかに生産性を向上することができます。
- 生産性ベンチマークテストの際、透明効果やドロップシャドウなどの頻繁に使用される効果を作成するのに、QuarkXPress 4.1JとAdobe Photoshopの組み合わせでは、Adobe InDesign 2.0Jの4～5倍もの時間がかかりました。
- こうした生産性の向上により、広告や雑誌出版の制作工程で大きく時間を節約できます。

当初から、Adobe社の新しいページレイアウトアプリケーションは、デザイン面での可能性を広げる試みを行ってきました。Adobe InDesign 2.0Jで容易に実現可能な効果の多くは、これまではAdobe PhotoshopやAdobe Illustratorなどといった他のアプリケーションを必要とするものでした。

しかし、ユーザーの大半がそのような標準で搭載されている効果の利便性を理解しているとはいえ、生産性に実際に与える影響を評価するのはそれほど簡単なことではありません。このベンチマークテストのためにファイファー・コンサルティングでは、一部の一般的な効果を実現するのにかかる時間を評価し、デザイナーが別のアプリケーションで同じ効果を得るためのワークフローと比較しました。

テストの結果は目覚ましいものでした。文字にフチを付けた見出しの作成は、Adobe InDesign 2.0Jでは約30秒で実現できました。ところが、Adobe Illustratorで見出しを作成して、QuarkXPress 4.1Jに配置する工程では4倍以上の時間がかかるのです。テキストボックスに対する透明効果の作成では40秒強でしたが、Adobe Photoshopを使用して同じ効果を得るには3分以上を要します。

**創造性に対する影響：**これらの結果から導き出せる重要な側面として、デザイナーの創作の自由度が高まる点が挙げられます。透明効果などの効果の搭載によって、単に生産性が向上するだけでなく、デザイナーはアプリケーションを切り替えることなく自由に試行錯誤することができます。これはページレイアウトアプリケーションに、さまざまな他のアプリケーションで作成したグラフィック要素を配置することが多くなっている現在のデザインワークフローとは極めて対照的なことなのです。Adobe InDesign 2.0Jの提示する可能性が、今後数年間にグラフィックデザインに与える影響はたいへん興味深いことです。

## 統合された機能による生産性の向上

Adobe InDesign 2.0Jでのもっとも劇的な生産性の向上は、アプリケーションで直接利用できる機能に関連します。QuarkXPress 4.1Jのワークフローでこれらの機能と同じ効果を得るためには、Adobe PhotoshopやAdobe Illustratorなどの他の製品に頼ることになります。

その結果、Adobe InDesign 2.0Jではドロップシャドウや透明効果の作成が数秒で実現できるのに対して、QuarkXPress 4.1Jのワークフローでは数分が必要になるのです。

さらに、別のアプリケーションや追加ファイルが必要ないため、デザイナーは簡単にデザインを試すことができますから、修正が必要な場合の処理も速くなります。

ドロップシャドウの作成—テスト合計時間—スペックでの比較  
時間単位：秒

